

健康増進活動拠点病院として、病院にかかわるすべての人々の健康づくりを支援していきます。

城北病院が 2015 年 1 月にヘルスプロモーションホスピタル (Health Promoting Hospitals and Health Services 以下、HPH) の世界的ネットワークに登録し、1 年が経過しました。2015 年 10 月には日本 HPH ネットワークが結成され、今後国内での活動が進むことが期待されます。城北病院では、6 月に埼玉県で先駆的に HPH の活動に取り組んでいる医療生協さいたまの牛渡君江氏をお招きして全職員学習会を行い、7 月から各職場より HPH 推進委員を選出し、1 職場 1HPH の取り組みを開始しました。「病棟の入院患者の喫煙状況を把握し、禁煙外来へ年間 3 名つなげる」、「透析患者の生活を把握し、緊急連絡先リストを作成し、患者宅訪問を行う」など



りくつなケアネット金澤研修会 開催

地域で支える顔の見える連携

2015 年 11 月 5 日、2 年ぶりに、「りくつなケアネット金澤」の研修会が城北病院を会場に開催されました。参加者は 60 名。医師・看護師・ケアマネ・リハスタッフからアロマセラピストと幅広い職種の方に参加いただき、「地域で支える顔の見える連携」のために研修を行いました。今回は「高齢者の外科手術一住み慣れたこの町に元気に帰るための工夫と連携」をテーマに、三上外科医からの講義と、外科病棟看護師からせん妄や認知症の事例を通じた看護の取り組みの報告を受け、その後参加者でグ

実際の業務に関わることや、職員の健康づくりのために「始業前の体操」や「エレベーターを使わず、階段を昇り降りする」などの職場目標を作成し、実践を開始しています。また外来・入院患者向け「たばこ教室」、外来での保健師によるロコモティブシンドロームの啓発などの活動も継続しています。地域での取り組みとして、健康友の会金沢北ブロックと協力して取り組んでいる「健康チャレンジ」では、参加者を対象としたライフスタイル・主観的健康観・社会的ネットワークに関するアンケート調査を実施しています。

今後も HPH として患者、地域、職員の健康づくりに取り組んでいきたいと思ひます。

ループ討論を行いました。城北病院のできるだけ「抑制しない」とりくみに驚きの声があったり、病院側が「こんな状態で帰ってよかったのか」という思いに、在宅側から「非日常な入院生活から、治りきってなくてもできるだけ早く自宅に帰したほうが良い。そのあとは、在宅で支える。そのためには早めに情報共有し一緒に検討していくことが重要」と、日頃の取り組みや課題を再確認できる機会になりました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

私たちがめざすもの

- 1 患者の立場に立ち、インフォームドコンセントを大切にします。
- 2 専門的な力量向上に努め、安全安心の医療・福祉の提供をすすめます。
- 3 すべての人々の健康づくりを支援し、安心して住み続けられるまちづくりに努めます。
- 4 人権を守り無差別・平等の医療・福祉をめざします。

医療福祉宣言

城北病院 城北診療所 2015

発行 城北病院 医療福祉連携相談室

〒920-8616 金沢市京町 20-3
TEL 076-251-6111 FAX 076-208-5231
http://jouhoku-hosp.com
E-mail renkeisitu@jouhoku.jp



医療福祉連携相談室だより

Jo-HOKU No. 41

2016.1.1 winter



城北病院 院長 大野 健次

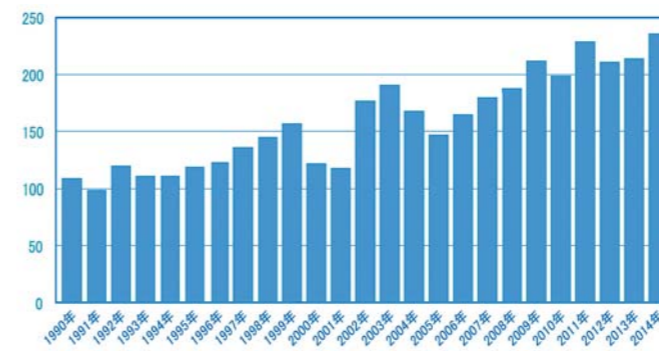
あけましておめでとうございます
～伝統を守り、新病院建設を成功させたい～

あけましておめでとうございます。いよいよ、2016 年春に城北病院の現地建て替えでの新病院建設が始まります。この京町で育てられ 60 年の年月が流れています。地域の人々がお金を出し合い作った診療所が少しずつ大きくなり、現在の病院となりました。この伝統を守り続け、この地で地道に頑張っていこうと思っています。

今後は、団塊の世代がすべて後期高齢者になる 2025 年問題と、2040 年をピークとする多死社会が待っています。新年早々、縁起が悪いかもしれませんが、城北病院での死亡退院数を示します。

1990 年代には年間 100 人程度であった死亡退院数が、現在 250 人に迫ろうとしています。地域の中小病院の役割として、看取りというものもあってと思っています。政府は、2006 年の介護報酬で特養での看取り加算を導入するなど居宅における看取りを推進していますが、病院での死亡割合は変わっていません。報道にもあるように、下流老人や、お金がなく無認可介護ハウスに入居する方など、経済的困難により最後を過ごす場所を探すことが難しくなっている時代です。

新病院の建設は 3 年半かかりますが、完成時には緩和ケア病棟が 20 床稼働する予定になっています。この



■ 城北病院死亡退院数

ような時代には、看取りも含めて中小病院が果たす役割は大きなものがあると感じています。今後も無料低額診療などの公益性の高い事業を行いながら城北病院の新病院建設を成功させたいと思っていますので、今年もよろしくお願ひいたします。

立ち上げました！

認知症ケアチームを

2015年5月に

城北病院認知症ケアチームの紹介

城北病院副看護部長
藤牧 和恵



認知症ケアチームのメンバー

【チーム立ち上げの経緯】

「認知症 800 万人時代」と言われる今、病院においても認知症をもつ方が増え、治療の場面で対応に困ったり、倫理的に迷う場面が多くあります。入院という環境や、医療従事者の対応によって不穏になったり、落ち着いたりもします。城北病院では、認知症ケアの知識をもった一部の職員だけでなく、職員全体が認知症の理解ができるようしたいと考えました。そして、2016 年から着工が始まる新病院の建設を控え、医療の質を向上させていくとくみのひとつとして、認知症チームをつくることになりました。内科医師 1 名と、認知症ケア専門士4名、看護協会の専門研修を修了した看護師 2 名を中心に、医師、看護師、介護福祉士、作業療法士、理学療法士、薬剤師、約 15 名体制で『認知症ケアチーム』を立ち上げ、活動をスタートしました。(写真はメンバーの一部)

【これまでの取り組み】

チームメンバーは、認知症ケアの知識がある人、興味がある人、苦手な人様々ですが、それぞれの思いを出し合い、目標をもって取り組もうと年間計画を立てました。(資料1)

< 資料1 2015 年度認知症ケアチーム年間活動計画 >

5月	自己紹介、チーム目標を確認
6月	年間計画確認、学会参加報告
7月	学習「認知症の基礎」、事例検討「排泄ケア」、職員アンケート実施
8月	職員アンケート分析による課題整理、事例検討「転倒」
9月	A病院院内デイ(ユニットケア)、事例検討「ドレーン抜去」、学会発表
10月	学会参加報告、事例検討「内服管理」
11月	認知症サポーター養成講座開催、事例検討「徘徊」



最初に取り組んだ職員アンケート(医師、看護師、介護福祉士、補助者、セラピスト対象)では、7割の職員が認知症のケアに自信がないと答えました。チームに対しての要望もたくさんありました。学習会(看護師対象、全職員対象)の開催や、困った時に相談できるシステムづくり、具体的対応についてのアドバイスが欲しいという要望が多く出されました。地域の中で指導できるくらいに頑張してほしいという期待の声もいただき、まだまだそこまで及びませんが、期待に応えられるように頑張っていきます。

これまで当院では、療養病棟や地域包括ケア病棟で集団レクリエーションを行い、認知症患者様の精神的安定、夜間不眠やせん妄の改善に有効であるという経験をしています。そこで、他病院で院内デイケア(ユニットケア)の見学をさせていただき、当院でもぜひ取り組んでいきたいと考えております。また、チーム内で事例検討を中心に学習を進めています。疾患と症状をアセスメントする力、生活の視点での気づき、環境面・関わり方でのアドバイスなど、他部署・他職種と意見交換することで、違った視点でケアを考えることができるようになったという感想が聞かれています。その他、学会に参加して他の病院の活動で刺激を受けたり、自分たちの課題を見つけたり、学んできたことを共有しています。

【認知症ケアチーム今後の目標】

- ・職員が認知症を理解し、認知症のある患者様を自信を持ってケアできるようにしよう。
- ・安心して療養できる環境を提供し、患者・家族・職員が満足できるケアを目指そう。
- ・在宅との連携で早期退院できるように、入院時のアセスメント、家族・職員への指導、退院調整ができる力をつけよう。
- ・院内デイを開始できるように準備しよう。
- ・地域の医療懇談会や患者会、青空健康チェックなどで、認知症のチェックや相談ができるようにしよう。

私達は患者様の立場に立ち、無差別・平等の医療、人権を尊重した医療活動を行なっています。患者様を中心としたチーム医療と、身体抑制をしない医療活動をがんばっています。認知症ケアチームとして、それぞれの職種の専門性を発揮し、患者様・家族・職員が笑顔になれるように力を発揮していきます。そして、近隣の施設と連携し、認知症があっても地域の中でその人らしく安心して生活できるように、地域の一員として職員一同頑張っていきますので、よろしくをお願いします。